
THE WORDS

カンガルー通信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE WORDS

【Nコード】

N3633M

【作者名】

カンガルー通信

【あらすじ】

全能の神“名創親”が与えた役割であり生きる意味である“授名”と、その力の源である因果とが人を支配する世界“秩序”。跳梁跋扈する意味を喰らう魔物“虚獣”達の急増、我欲に走る“貴族”達の引き起こす絶え間ない内紛、世界は正に存亡の危機にあった。

“名創親”の御遣いとされる“異邦人”達は、世界を救う為に「世界を平らげる」と“神託”に記された“御子”を探し求める。果たして地上に降り立った“御子”ユウ。彼を巡って巻き起こる様々な

陰謀、惨劇。多くの人々との出会いを通じてユウは何を感じ、何を
考え、何を知り、如何なる決断を下すのか。ファンタジー長編。

序。或ル翁死ノ淵ニテ御子ト出会ウ（一）

“彼等”^{かれら}の森の奥深く、因果の残り滓を貪る下等な虚獸^{じじゅう}すらもめつたに足を踏み入れず、人の世を遍く照らすと謡われた“名創親”^{なつけおや}の陽の光も届く事の無い常夜の地。そこでは諦めと絶望を背負いながら横たわり層を成す“彼等”と、それを押しのけて外へと向かおうとする姿そのままに全身に苦悶を刻みつけたまま力尽きた“彼等”との夥しいまでの四肢が複雑怪奇に絡み合い、さながら巨大なガジユマルの樹の幹の様。その幹の一つ、根元の辺りに暗褐色の長衣に身を包んだ年老いた男の姿があつた。幹にもたれかかりうずくまる彼から放たれる因果の燐光は、“彼等”達の灰色の肌をぼんやりと照らしている。

“秩序”^{せかい}とその外とを分つ嘆きの門をくぐつてからの、長い長い旅路。幾度と無く襲いかかつてきた虚獸の群れ。再び立ち上がるには、男は余りにも疲れていた。フードの奥から覗く顔にはすでに“彼等”に負けず劣らずの深い皺が張り付き、灰色の瞳は光を失っていた。皺に埋もれるように額にある親指の爪程の大きさの真四角の入れ墨は彼が“異邦人”^{いほうじん}である事の、その横に加えられた六本のマツチ棒長の入れ墨は彼が“秩序”から選ばれた“探索者”である事の証だ。彼の萎びた身体の綻びから漏れる因果が傍の“彼等”へと僅かながら結ばれると、俄かに活力を得たある者の心臓は微かに拍動し、ある者の首は肺に溜まった空気を吐き出す様に唸り、指先は蚯蚓みたいに蠢いた。だが、授名^{さすかりな}、因果を湛える器を失った“彼等”の凍りついた時が動き出す事は決して無い。“秩序”の外に佇む以外の一切の役割を奪われた“彼等”には、言葉を紡ぐ事すら儘ならないのだ。

年老いた“異邦人”マオは己の死期が近い事を悟っていた。虚獸を

避ける為に、彼は森の深奥に身を潜めていたのだった。マオは、死を恐れてはいなかった。ただ、長く生き過ぎた事を後悔した。探索の任に就き共に“嘆きの壁”をくぐった第六旅団二十人の同胞達は一人減り二人減り、彼一人を残すばかりとなったのは大分と昔の事だ。旅立った頃はまだ、今マオが蹲っている辺りは森になってすらいなかった。年々森は深くなり、“秩序”の外側を浸食する速度はここ数年で急加速している。“虚獣”の数も、それと相対する兵团や旅団の数もだ。時折すれ違う後発の旅団から共に旅をしてはどうかと申し出られる事もあったが、マオはそれらを全て丁寧に断った。旅団の“探索者”は額の六本線から、彼の単独行は何十年もの間旅を続けている最初期の旅団の生き残りとしての矜持なのだろうと納得し、逆に差し出がましい事をと非礼を詫びて通り過ぎていった。

マオに生き残りとしての誇りなど、微塵もありはしなかった。彼は只、仲間の死を悲しむ事に臆病になった老人でしかなかった。新たな旅団に加わって自分より遥かに年若い探索者達が死んでゆく姿など、見たく無い。だがまさか天寿を全うする事になるとはと、彼は苦々しい思いだった。弱った今の自分の身体では、中位の虚獣にすらあつさりと喰い殺される。虚獣に怯え隠れる“異邦人”など、無様の極みでしかないのだ。

序。或ル翁死ノ淵ニテ御子ト出会ウ（一）（後書き）

拙い物を読んで戴いて有難い限りです。ちょこちょこ更新していきますので、宜しくお願い致します。

序。或ル翁死ノ淵ニテ御子ト出会ウ（二）

マ才は、また不意にきりきりと痛み出した胸をさすった。傷口から滲み出たまだ乾ききらない血に、添えた指がぬるりと滑る。治りが遅い。怪我をしたのがいつの事が確かめようと足元の袋から革張りの百科事典程にも分厚い“自律する”日記を取り出して紐解いた。マ才が“秩序”を出立してから今日までの記録が角張った細かな文字で仔細に綴られたそれを読むと、虚獣との戦いで胸を抉られたのは十日も前の事なのだ。最後の一行には『治りの遅い胸の傷に私は死期を悟った。』と黒々としたインクで加えられていた。自動筆記といえども、その弱気な文句は彼の今現在の心境そのものだ。

ぼんやりと遠くを見つめていると、鬱蒼と茂る“彼等”達の大樹の隙間から不意に光が毀れるのが見て取れた。光源はマ才が横たわる場所からは大分離れている様で、微かな光が蠟燭みたいに揺らめきながら連なり横切っていく。

「妙だ。」

マ才は自身に話しかける様に呟いた。距離と暗さからその姿は皆目判らずただ放出される因果の不安定さは如何にも寺院を目指す旅慣れない“追放者”の一団、といった態だが、長年この見放された大地で暮らしてきた老人にはそのありふれた光景に拭いきれない違和感を感じたのだ。旅人達が森の深奥部に迷い込む事はまず有り得ない。それは不慣れならば不慣れである程にだ。“彼等”のおぞましい姿と足音ですらこだまする静謐さに、人は本能的に足を踏み入れる事を拒否するものだ。だが、彼らの確かな足取りは何だろう。一列になって歩幅を乱さず、まるで行く先が決まっているかの様に。虚獣が寄り付かないのを逆手に取って深奥部を抜け道として利用する“案内人”が少数ながら存在する事もマ才は知ってはいたが、ここを通り抜けても“追放者”を収容する施設は近辺に無いはずだっ

た。

つらつらと流れていく光の列は、一種幻想的な雰囲気を用意していた。ゆったりとした音楽を聴いている時と同じ心地よさに思わず、

「美しいものだ。」

マオはそう口にしてから、違和感の根元にはたと気がついた。光の揺れが、どうにもリズムミカル過ぎる。いくら因果の揺れが個々の精神性に依っているとはいえ、集団として方向付けられた心理状況はある程度は互いに同調していくものだ。それが目の前を横切る彼等には無かった。巧妙に隠されたパターンをそれぞれが時間差でなぞる、微妙に時刻のずれたたくさんの時計が一斉に動いているのを眺めている様な奇妙さ。

「…偽装燐光？」

燐光偽装は手間も掛ければ危険も伴う技法だ。単純に被術者の“授名”を“追放者”に上書きするだけの作業なら“処刑吏”程度の剥奪と付加の力でも時間を掛ければ可能だが、本来の“授名”を損なわずとなれば話は別だ。“执行官”級の上位貴族でなければ技術的に不可能だろうし、それでさえ安全とはいいいない。 “追放者”が被術者自身の役割として定着してしまえば再び秩序へと帰還する事すら叶わず、“彼等”と成り果てるしかないからだ。そんな危険を冒してまでの隠密行動に、マオは並大抵ではない不穏さを感じた。あらゆる可能性を考慮していく。秩序若しくは寺院から双方の討伐を目的として派遣された秘密部隊だろうか？それとも亡命を企てる貴族か？どちらも線としてかなり弱いだろう。虚獣の眼を欺くなら燐光そのものを隠蔽してしまう方が余程簡便だろう。それに軍事行動ならば、わざわざ偽装を施さずとも森の浅い所には我が物顔で練り歩く仰々しい甲冑に身を包んだ“掃討者”や取り澄ました顔の“武装行政官”達がいくらでもいる。難民達を喰い物にする所謂虚賊の類であろうかとも考えたが、マオは静かにかぶりを振った。休息を撮る一帯を何度も探索したが、“彼等”の枯れ具合から見てここ

十年は人が入った形跡は無かった。ねぐらでも無いなら、こんな所に立ち入る理由等無いはずだ。

だからこそ、何故。マオは胸の痛みも忘れ思考を張り巡らせていく。ただ、目立たぬ様に。広大な秩序の外、果てなく続く寂莫の砂漠にあつて、何者にも注視されぬ様に。その意図の示す物は。

「まさか。」

長年の暮らしから殆ど癖になった独り言がマオの口から漏れたのが呼び水となつたかの様に、燐光の揺らぎがぴたりと止まった。

序。或ル翁死ノ淵ニテ御子ト出会ウ（三）

偽る事を止めた者達の森全体を照らし出す燐光のその明るさは、彼がかつて眼にした事の無い程の物だった。原色の光の洪水はトロピカルな趣で、マオはその色彩鮮やか光景に目を瞠ると共に、今わの際になつてとてつもない厄介事に巻き込まれる予感に薄い唇を苦々し気に歪めた。目前で展開される一連の流れは所謂迎え火むかえびと呼ばれる集団で虚獣うつしけを炙り出す為の技巧だ。何人かの“異邦人”が共同で同時に燐光を放出して周囲の虚獣の群を呼び寄せる囷となり、傍に潜む本隊が返り討ちにする。“探索者”の制度が出来た頃に考案された古い手法で、旅団にまだ人が居た頃には若かりしマオ達自身もその手を何度も利用したものだ。しかし、これほどまでに大規模な送り火は今までに見掛けた事がない。そもそも送り火は三、四人での共同作戦ですら旅団が半壊する程の打撃を受ける程の危険を孕んでいる。突然どれ程高位の虚獣に襲われるか、やってみなければ見当すらつかないからだ。詳しい所はマオ自身も日記を見てみなければ定かでは無いが、つい何年か前にも第一〇三旅団が送り火の際のアクシデントで全滅したのを目にした。

それは森の手前の辺りでの出来事で、旅団が篝火を焚いたのはマオが居た場所から約二千公歩程いちふ離れた所だった。篝火に誘き寄せられて安易に近くを通りがかる二足歩行するゼリーの塊くわいの様な外見の“愚かにして鈍”ストゥービドやらつがいで絡まりながら転がる“偏る愛”バーシャルやらの小物を潰しながら真黒な空を茜に染める姿に大分火勢が強いなど眺めていた矢先、唐突に篝火が掻き消えた。何事が起こったのかとその場所に駆け付けると、その場には比喻でもなく賽の目状になつた“異邦人”達の残骸が残されていた。人一人分の広さの血の水溜りの中に落ちている一公指大いちゆびの肉で出きた立方体。その全てが、まだ経験の浅い“探索者”達の肉を悉くひき潰し圧縮したものだった。

た。その情景の凄惨さにはマオですら吐き気を覚えた。かろうじて挽肉の具材になる事を免れた一冊の日記を見つけたマオは、その肉塊が旅団全員分である事と最上位の虚獣である“孤独”^{ストレイ}が深淵から時空を歪ませて顕れ、一瞬にして旅団員達を圧殺した事を知ったのだ。

今回の篝火の規模は、往時の悲劇の際の比では無かった。光も奔流はゆつくりと一所に寄り集り、その火勢は山火事ながらだった。人数は一旅団の総員程だ。おそらくここから三十公日歩離れた森の手前からでも、光の柱が立っているのを目にしているだろう。光に照らされて、森の深奥は俄かに秩序内^{ちつじょ}の真昼の様な明るさだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3633m/>

THE WORDS

2010年10月8日22時22分発行